

令和4年度 沼津市・富士市連携埋蔵文化財活用講演会

狩野川 ・ 富士川が

作り出した

古代社会

講演会資料集

～沼津・富士の原風景を考える～

令和5年3月

沼津市教育委員会・富士市教育委員会

例　言

1 本書は、令和4年度 沼津市・富士市連携埋蔵文化財活用講演会『狩野川・富士川が作り出した古代社会～沼津・富士の原風景を考える～』に係わる資料集である。

2 講演会は、沼津市教育委員会と富士市教育委員会の共催により実施した。

3 本書の編集は、富士市教育委員会文化財課が行った。

4 講演会は以下の日程で開催した。

2023（令和5）年3月12日（日） 会場：沼津市市立図書館4階視聴覚ホール

※ 講演会の様子は、沼津市公式YouTubeチャンネルにて後日配信予定。

また、関連した特別展示を以下の日程で開催した。

2023（令和5）年3月6日（月）～同年3月19日（日） 会場：沼津市文化財センター第3展示室

目　次

例　言

目　次

沼津と富士の原風景を探る～本企画の開催趣旨にかえて～（木村　聰） 1

駿河・伊豆の古代社会の成立　一カツオがつなぐ都と駿河・伊豆一（三舟　隆之） 4

沼津における古代の遺跡様相（小崎　晋） 9

富士郡家の原風景と富士川（佐藤　祐樹） 17



昨年度の講演会動画と資料集を、こちらの二次元バーコードからご覧いただけます。



沼津市公式チャンネル
→『愛鷹山に眠る』で検索



[その他] →
[沼津市文化財センター講演会]



資料集
(PDF)

開催趣旨

沼津と富士の原風景を探る

～本企画の開催趣旨にかえて～

木村 聰

(沼津市教育委員会)

1 はじめに

沼津市や富士市を紹介するとき、どういう言葉を使うだろうか。例えば沼津市のHPを見ると、「首都 100 キロメートル圏に位置する静岡県東部にあって恵まれた自然環境と優位な地理的条件のもとで、東駿河湾地域、伊豆方面への交通拠点あるいは広域的な商業・文化拠点として、古くからこの地域の政治、経済、文化の中心的役割を担ってきました」とある。では、この「中心的役割」はどの時代までさかのぼることができるのか。人によって、いくつかの回答はあろうが、考古学の立場からは、現在の中心市街地に大規模な遺跡が展開し始めた時期、すなわち今回テーマとして扱う「奈良時代」が、現在の沼津市や富士市の原風景を作り出した時期と提示したい。

奈良時代とは、古墳時代が終わりを迎える、代わって法と仏教で国を治めていた時代である。行政単位として、沼津市北部には駿河国駿河郡、富士市には駿河国富士郡が成立する。両郡の役所や寺院などの文化・経済・政治の中心は、現在の市街地とほぼ重なるように展開していった。

では次の問いは「なぜここに郡が成立したのか」ということであろう。それを読み解くキーワードのひとつが「川」である。

2 川は要地をつなぐ道

自動車が主な交通手段となった現代において、河川交通を用いて移動をした経験を持つ人はあまりいないであろうが、かつて川は重要な道のひとつであった。奈良時代ではそれ以前の時代よりも水運の発達があったと考えられ、郡の中でも中心的な施設は、川の近くに築かれることが多い。これは駿河郡や富士郡も例外ではなく、主要陸路である東海道と川との結節点に文化・経済・政治の中心地が発達した。現代ではやや川から離れる道もあるが、国道 1 号（東海道）と国道 136 号（狩野川沿い）、国道 246 号（黄瀬川沿い）、国道 52 号（富士川沿い）などの道が両市の物流を支える主要街道となっていることはこの地で暮らす人にとっては改めて述べることでもないだろう。

ただし、「川はいつだって存在していたではないか」、「河川交通はそれ以前でも使われていただろう」という反論もある。確かにそのとおりで、古墳時代にもそうした道の利用がなかったわけではない。それでも原風景を奈良時代と設定するのは、駿河国を中心とした駿河郡の遺跡立地に理由がある。

富士郡の中心地は古墳時代でもある程度遺跡が展開するが、駿河郡の中心地はあまり遺跡が展開していなかった場所である。つまり奈良時代になって、狩野川沿いという新たな場所に郡の中心が成立する点に特徴がある。これは、伊豆方面への水運をより重視したことと示唆するもので、古墳時代以前に存在していた物流の在り方が奈良時代に変化を迎えているものと捉えておきたい。

3 駿河郡と富士郡の共通点や相違点を探る

環境が沼津市・富士市の形成に大きく影響を与えていたという考えは理解しやすく、一見納得してしまうような考え方である。しかしこの考えは、あくまで主催者（のひとり）が抱いている仮説であって、具体的な資料に基づき、まだまだ検証すべき項目が多くあると考えている。今後の遺跡の調査によっては見当はずれのことを言っている可能性もあるが、現段階の資料を用いて沼津市・富士市の原風景がいかなるものであるかを具体的に検討することは無意味なことではないと考え、今回の企画を進めた。

講演会は沼津市内で実施しているが、昨年度に引き続き、研究を先行する富士市との共催である。昨年度は「山」をテーマに愛鷹山に約1000基も展開した古墳群について扱ったが、古墳群の中心が現在の両市の市境にあったため、行政区分を取り扱って両市の学芸員が「愛鷹山南麓の古墳群および集落」という同一の視点で遺跡を見ることで、愛鷹山の古墳群全体の特徴を抽出することができた。詳細な成果は本書目次下の二次元バーコードから講演会動画を見ていただきたいが、今回は古代東海道と巨大な河川によって形成されたという共通点は持つものの、駿河郡と富士郡という距離が離れた2つの中心地を比較検討し、その特徴を把握することを目的としたい。

ただし、この目的を達成するためには、地域の考古資料だけでは不十分である。奈良時代は文字資料が残る時代であり、これらを無視することは得策ではない。考古資料と文献史料を組み合わせてより詳細な様相を検討することが必要である。そのため、講師として日本古代史・宗教史を専門とする三舟隆之氏に全国的な視野を踏まえた駿河国の様相についてお話しitただくよう、依頼した。また三舟氏は現在、古代食研究の一環で、駿河国・伊豆国から貢納されていたカツオについても研究を進められている。駿河国と都がどのようなつながりを持っていたのか、様々な視点から解説itただく予定である。そして三舟氏の講演後は、沼津市富士市から遺跡調査成果を紹介する構成となっている。

少なくとも沼津市ではあまり取り上げられていない時代の講演会であるが、両市における発展の素地は奈良時代には確実に存在している。そんな思いを込めて、タイトルには「原風景」と入れ込んだ。今回の企画が皆様の足元を見直すきっかけとなれば、企画者として幸いである。

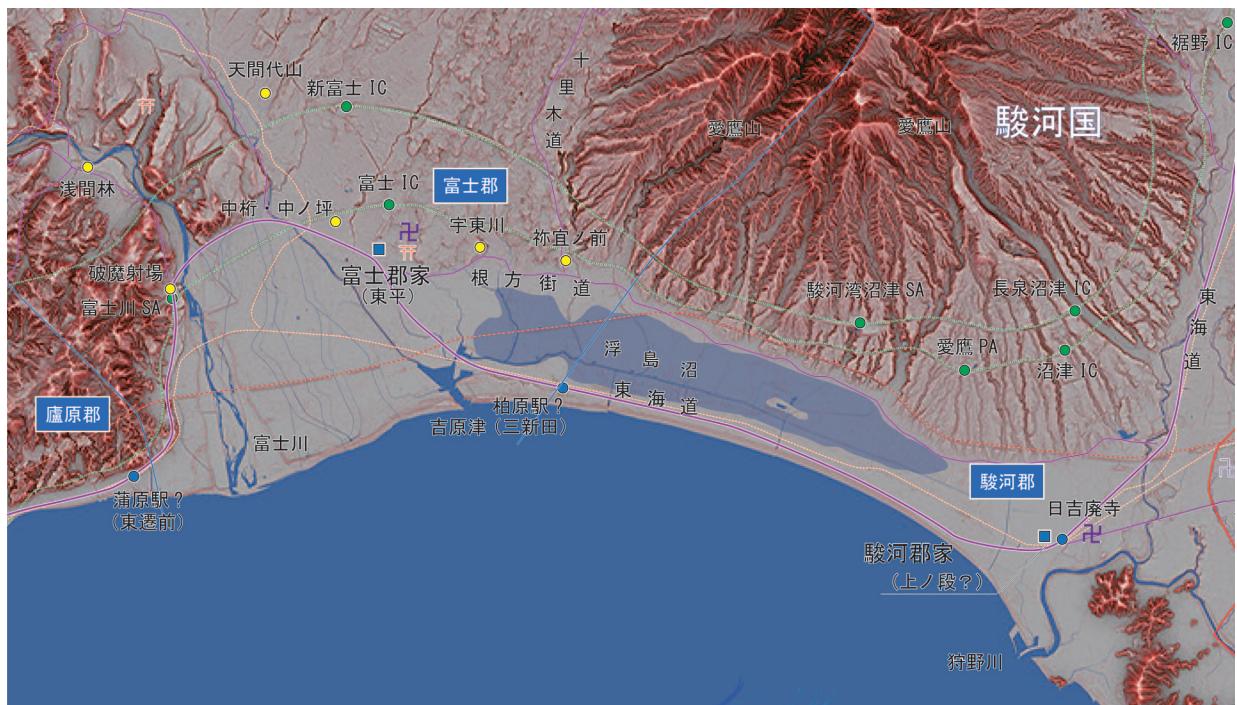


図1 富士郡・駿河郡の主要遺跡分布図



写真1 狩野川から沼津市中心市街地を望む

講 演

駿河・伊豆の古代社会の成立

— カツオがつなぐ都と駿河・伊豆 —

三舟 隆之

(東京医療保健大学)

I. 大化前代の駿河・伊豆

1) 駿河東部の古墳時代

- ① 駿東・伊豆地域における古墳の出現と展開…高尾山古墳（3～4世紀）から長塚古墳（6世紀前半）へ
- ② 全国の前方後円墳体制の展開
- ③ 古墳時代の終わりと火葬…清水柳北1号墳

2) 国造の成立（史料1：国造本紀）…国造の成立は6世紀後半？

- ① 珠流河国造…国名・郡名国造、本拠地は駿河郡か→狩野川から富士川までが領域志賀高穴穂朝の世。物部連の祖大新川命の児、片堅石命を以て、国造に定め賜う。

→『続日本紀』延暦十年（791）四月十八日条

「駿河国駿河郡大領正六位上金刺舍人広名を国造と為す」

※駿河西部は庵原国造→庵原郡が中心

② 伊豆国造…

神功皇后の御代、物部連の祖天麁杵命（あめのぬぼこのみこと）八世の孫、若建命を国造と定め賜う。難波朝の御世、駿河国に隸す。飛鳥朝の御世、分置くこと故の如し。

→『続日本紀』天平十四年（742）四月甲申条

「外從七位下日下部直益人に伊豆国造伊豆直姓を賜う」

3) 屯倉の設置（史料2：『日本書紀』安閑天皇二年（535）五月甲寅条）

（前略）駿河国の稚贊屯倉を置く。

→田子の浦（吉原湊）か

4) 大生部多と秦河勝（史料2：『日本書紀』皇極三年（664）秋七月条）

東國の不尽河の辺の人大生部多、虫祭ることを村里の人に勧めて曰はく、「此は常世の神なり。此の神を祭る者は、富と寿とを致す」といふ。巫覡等、遂に詐きて、神語に託せて曰はく、「常世の神を祭らば、貧しき人は富を致し、老いたる人は還りて少ゆ」といふ。是に由りて、加勧めて、民の家の財宝を捨てしめ、酒を陳ね、菜・六畜を路の側に陳ねて、呼ばしめて曰はく、「新しき富入来れり」といふ。都鄙の人、

常世の虫を取りて、清座に置きて、歌ひ舞ひて、福を求めて珍財を棄捨つ。都て益す所無くして、損り費ゆること極て甚し。是に、葛野の秦造河勝、民の惑はさるるを惡みて、大生部多を打つ。その巫覡等、恐りて勧め祭ることを休む。（以下略）。

（大意）

東国の富士川のあたりに住んでいた大生部多は、橘の樹や曼椒（ホソキ）に見られる親指ほどの緑の蚕に似た毛虫を村里の人たちに「常世の神」だと言い、この神を祭れば富と長寿を得られると説いた。そうしたら巫覡（ふげき）たちも託宣により「貧しい人は豊かになり、老人は若返るであろう」と説いたので、人々は家の財産を喜捨し、常世の神の新しい宝を求めて、酒や野菜、牛や馬・鶏などを並べ、歌や舞のドンチャン騒ぎを行った。この新しい宗教は大流行となり、やがて都までに及んだ、とある。秦河勝はこの事件を聞きつけ、人々を惑わすとして、大生部多を打って事件を収めたという。人々は「太秦は神とも神と 聞え来る 常世の神を 打ち懲ますも」と歌った。

※大生部氏…皇子を養育するための「壬生部（みぶべ）」という名代・子代の一種。

（参考）平城宮跡出土木簡

→駿河国駿河郡：「郡司大領外正六位□〔上カ〕生部直□□〔信陀〕理」

※常世の神…中国の民間道教の系譜を引く神。道教は中国民衆の中で自然発的に生まれてきたいろいろな原始信仰（アニミズム）を集大成したもので、主に不老不死を願う神仙思想を中心に神託を伝える巫祝（ふしうく）信仰などが基盤となって成立した。皇極紀には村々で雨乞いのために牛馬を屠殺したり河伯を祀るなど、中国式の祭祀を行っていることが見える。→沢東A遺跡出土牛骨

II. 大化改新と駿河・伊豆

1) 郡評制の成立…国造制から郡評へ、律令制国家の成立

- ①郡衙の出現—東平遺跡（富士郡家）の成立、上ノ段遺跡（駿河郡家）→唐三彩
- ②古代寺院—富士郡：三日市廃寺、駿河郡：日吉廃寺・市ヶ原廃寺・宗光寺廃寺
- ③律令制祭祀…斎串・人面墨書き土器→三島市箱根田遺跡（津？）

2) 伊豆国の成立（史料3：『扶桑略記』天武9年7月条）

駿河国二郡を別けて伊豆国と為す。

→田方郡・賀茂郡か、「壳羅評」（那賀郡入間郷壳良里か）の存在（『飛鳥藤原宮出土木簡概報』17-31）

III. 堅魚木簡の貢納と堅魚製品

1) 古代の税制…租庸調、雜徭・兵役（軍団・衛士・防人）

堅魚の貢納=調・中男作物、贊

2) 駿河・伊豆国の郡郷と氏族

①駿河国富士・駿河郡の地名 … 駿河国（『和名抄』東急本）

富士郡…島田・小坂・古家・蒲原・駅家・大井・久武・姫名・神戸郷

駿河郡…柏原・矢集・子松・古家・玉造・横走・山崎・宍人・永倉・宇良郷

②伊豆国の地名…田方郡・賀茂郡・那賀郡

田方郡…新居・小河・直見・佐婆・鏡作・茨城・依馬・八邦・狩野・天野・吉妾・
有弁・久寝（平城宮木簡：久自牟郷も）

那賀郡…井田・那賀・石火郷（平城宮木簡：都比・丹科・和志・入間郷も）

賀茂郡…賀茂・月間・川津・大社・三嶋郷（平城宮木簡：色日・稻梓郷も）

③駿河国富士・駿河郡の氏族

富士郡：大生部・大伴部・中臣など。

駿河郡：金刺舎人・壬生直・春日部・玉作部・若舎人部・大伴部・車持部、
津守部・丈部・矢田部・弓削部など。

④伊豆国の氏族

田方郡：矢作部・檜前舎人部・金刺舎人部・膳大伴部・大生部・春日部・物部・
宍人部・委文部・玉作部・日下部・津守部・茜部・語部・神人部など。

那賀郡：宍人部・矢田部・物部・日下部・宇遲部・刑部・丈部など

賀茂郡：占部・矢田部・丈部・多治比部・平群部・伊福部・生部など

3) 木簡にみえる堅魚製品

※木簡とは何か…木片に文字を墨書したもの。古代では平城宮などの都城遺跡や地方官衙から多く出土する。その文字情報からさまざまな古代の社会を知ることが出来る。

・煮堅魚・龜（荒）堅魚・堅魚煎汁とは？

『養老賦役令』調絹縄条…「堅魚三十五斤」「煮堅魚廿五斤」

『延喜式』主計上諸国調条の駿河国…「煮堅魚二千一百三十斤十三両 堅魚二千四百十二斤」→「堅魚」は正丁（21～60歳までの男子）268人分、「煮堅魚」331人分

・堅魚煎汁と壺Gの謎…壺Gは堅魚煎汁容器か？

4) 藤井原遺跡出土の堀形土器の謎…御幸町遺跡・千本遺跡・中原遺跡など

→堅魚製品の水産加工工場群?

5) 貢納と運搬…陸上交通と水上交通…川の果たす役割

6) 古代の堅魚製品の再現に向けて

- ・堅魚製品の再現へのチャレンジ

①「龜（荒）堅魚」の再現…「伊豆国賀茂郡三嶋郷戸主占部久須理戸占部広遅調龜堅

魚拾壱斤／十両 員十連三節 天平十八年十月」の木簡からわかること

- ・平城宮内裏北方官衙地区から出土

- ・木簡の大きさは、 $323 \times 27 \times 5$ 、荷札に使用。

- ・伊豆国賀茂郡三嶋郷→賀茂郡は現在の静岡県東伊豆町から南伊豆町、三嶋郷は伊豆大島から伊豆諸島までの地域か。

- ・戸主占部久須理の戸口の占部広遅が、調として「龜堅魚」を天平十八年十月に「十一斤十両」分を貢納した、という意である。

- ・「養老賦役令」によれば、「堅魚」の貢納量は正丁一人に「卅五斤」(35斤=小斤)
→古代の度量衡では重量は「斤」「両」で表し(一斤=十五両)、さらに量りには大斤と小斤があり、大斤=小斤×3倍(通常の重量を量る際には「大斤」が用いられる)。大1斤=約670gで、「十一斤十両」では約7415gになる(重量)。

- ・一方、「十連三節」は「節」は本数を表し「連」はその「節」十本をまとめたものだから、「員十連三節」は「堅魚」103本=荒堅魚の数量、すなわち荒堅魚103本が「十一斤十両」の重さで運搬に使用する1籠の量。「十一斤十両」は7415gであるから、「堅魚」1本の重さは約72gになる→「荒堅魚」は現在の「塩鰹」か。

- ・「煮堅魚」の場合の貢納量は「二十五斤」→同様に三分の一は「八斤五両」

→「煮堅魚」は「荒堅魚」より重量は軽く、『延喜式』などから「荒堅魚」より高級品。

②「堅魚煎汁」…『令集解』には「謂、熟煮汁曰レ煎也、釈云、説文、煎熟、煮熬也。

音子仙反、案熟煮也。醤類也」とあって煮堅魚の煮汁を煮詰めたものか。「醤」と同じような調味料。『延喜式』大膳下では「凡諸国交易所レ進、醤大豆并小豆等類、(中略)、駿河国堅魚煎汁二斛、沢二好味者一別器進之。若当年所輸レ中男作物、不レ満二此數一者、正税充レ直、交易進之」

→堅魚煎汁は高級品。現在の「鰹色利」(カネサ鰹節商店)?

「人給所請堅魚煎壱合／御羹料(以下略)」の木簡から、羹汁(スープ)の出汁?

IV.まとめ

- ・古代の駿河・富士郡は3～4世紀に前方後方墳の高尾山古墳が築造され、その後駿河郡を中心に古墳時代前期・中期さらに後期まで展開した。
- 珠流河国造の成立…駿河東部
- ・一方富士郡は古墳時代前期・中期には有力な古墳は見られないが、古墳時代後期に有力古墳（伊勢塚古墳）が出現→稚贊屯倉の成立と関係？
- ・稚贊屯倉は壬生部の存在から上宮王家との関係→皇極紀の大生部多と秦河勝
- ・大化改新による郡評制の成立…珠流河国造から駿河郡・富士郡が成立
- ・天武朝に駿河国から伊豆国が成立
- ・律令制による貢納（調・贊・中男作物）→駿河・伊豆国を中心とした堅魚の貢納
- ・貢納される堅魚製品は、荒堅魚・煮堅魚・堅魚煎汁
- ・堀形土器・壺Gの分布→堅魚製品と関係か
- ・堅魚製品の製造拠点→藤井原遺跡・御幸町遺跡・千本遺跡・中原遺跡など
- ・流通の拠点…狩野川・富士川を中心とした津と官衙遺跡群の存在（箱根田遺跡・上ノ段遺跡・東平遺跡）

事例報告 1

沼津における古代の遺跡様相

小崎 晋

(沼津市教育委員会)

はじめに

今回の文化財講演会のテーマは「川」である。沼津市に流れる川でもっとも代表的なのは狩野川であろう。沼津市域には旧石器時代以降、ほぼ全ての時代で人の活動の痕跡である遺跡が確認されている。なかでも旧石器時代の遺跡で日本列島における最古級の年代を示す井出丸山遺跡や、古墳時代初頭の東日本において最古・最大級といわれる高尾山古墳など注目すべき遺跡が数多く存在する。このような各時代や遺跡を見ていく中で、「川」とのつながりをよく示す時期の一つが奈良・平安時代（以後、古代と表記する）である。特に狩野川下流域から河口部付近で確認されている遺跡の様相は当時の地域の在り様をよく示している。

そこで沼津市域を流れる狩野川流域で確認されている古代の遺跡を見ていくことで、沼津の当該期の遺跡様相と川との関係を見ていきたい。

1 沼津における古代の遺跡立地の概要

沼津市域における古代の遺跡は、浮島ヶ原（浮島沼）を挟むように富士市から東に延びて続く千本砂礫州上、狩野川右岸の黄瀬川扇状地上、狩野川左岸の香貫山から続く微高地上といった狩野川の両岸、などにその大半が立地する。このような遺跡の分布状況は古くは弥生時代中期から続くものである。また古墳時代後期から終末期にかけて愛鷹山麓には無数の古墳群が築かれており、この古墳群を総称して愛鷹山南麓古墳群とも呼ばれている。これが示す遺

跡の立地は当時の人々において主な生業であった水田耕作が可能な場所と近い位置に遺跡が展開していることを意味している。また、海辺に近い位置にも集落が形成されている。

このような中で、狩野川右岸の黄瀬川扇状地上には、次節で触れるような単なる集落遺跡のみならず、官衙遺跡と想定される上ノ段遺跡や寺院跡である日吉廃寺跡のような特殊な遺跡が存在する。また狩野川左岸の香貫山から続く微高地には大集落である御幸町遺跡が存在することから、狩野川の両岸に当時の沼津市域における政治・経済・文化の中心であったことを示している。



図 1 古代を前後する時期の主要な遺跡の分布範囲

2 古代の主要遺跡

ここで、沼津における古代の主要な遺跡をみていきたい。

(1) 集落

中原遺跡 中原遺跡は沼津市一本松地内に所在する弥生時代～古代にかけての遺跡である。平成20～22、平成28～令和3年度にかけて本調査が実施されており、平成20～22年度にかけて実施した3～8区（面積 計11,636m²）について平成27年度に報告書が刊行されている（沼津市教育委員会2016）。報告されている各調査区からは計104軒の竪穴建物や17棟の掘立柱建物跡、東西や南北を走る溝状遺構、そして無数の小穴が確認されている。各調査区からは土師器や須恵器といった土器や鉄鎌や刀子などの金属製品が多数出土している。また、ガラス小玉の鋳型や、分銅・鉸具といった特殊な金属製品が出土しており、単なる農村ないし漁村では考えられない遺物が出土しており、どのような集落であったかは不明な点が多い。

東畠毛遺跡 東畠毛遺跡は沼津市今沢外に所在する遺跡で6世紀後半から9世紀にかけての集落遺跡である。これまでに4次に及ぶ調査が実施されている（沼津市教育委員会1999・2000）。竪穴建物は1～3次調査で37軒、4次調査で15軒の計52軒が検出されており、うち古代のものが30軒以上である。一方、掘立柱建物跡はすべての調査を含めて数棟に過ぎないことから、集落としての特殊性を見出すことは難しい。ただし、黒窓14号窓式（K-14）や折戸53号窓式（0-53）といった9世紀前半の灰釉陶器とともに、緑釉陶器の小片や墨書き土器が出土していることから、当該期において有力農民が居住していた集落の可能性がある。

千本遺跡 千本遺跡は沼津市本字千本地内に所在する8世紀後半から9世紀にかけての遺跡で、千本砂礫州の東端、狩野川河口部付近に立地している。これまでに2次の発掘調査が実施されている。1次調査で37軒、2次調査で18軒と計55軒の竪穴建物が密集した状態で検出されている（沼津市教育委員会2002、2020）。また、土器では墨書き土器や線刻土器などとともに、多量の緑釉陶器が出土している。また、和同開珎や神功開寶、隆平永寶といった皇朝

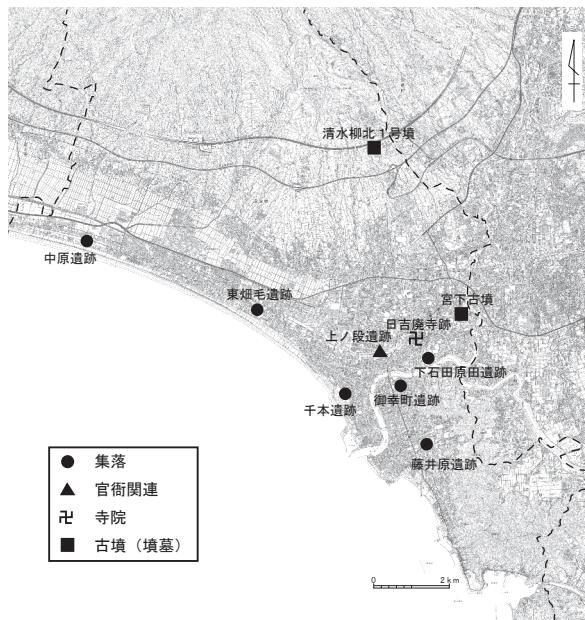


図2 古代の主要遺跡

十二錢も出土していることから、単なる集落遺跡とは考えにくい遺跡で、公的機関であったかもしれない。千本遺跡は狩野川河口付近に所在することから、明確な遺構は確認されていないものの、港的な役割を有した遺跡であったかもしれない。

下石田原田遺跡 沼津市大岡地内に所在する遺跡で、狩野川右岸で黄瀬川扇状地（御殿場泥流によってできた台地上）に立地している。平成10・11年度に発掘調査が実施されており、8世紀～9世紀前半にかけての住居址150軒、掘立柱建物跡96棟など多数の遺構が検出されるとともに、土師器・須恵器といった土器や金属製品などの遺物が出土している（沼津市教育委員会2000）。検出された掘立柱建物跡は調査区全体に分布するが住居址は調査区の西側に集まっており、遺構で分布が異なっている。また出土した土器には墨書きが記されたものや線刻が施されたものが出土している。中でも「廷人」と記された線刻土器が存在することは、検出された掘立柱建物跡群が倉庫群である可能性があることも含めて、官衙と推測されている上ノ段遺跡と関連した遺跡である可能性が示唆される。

御幸町遺跡 沼津市御幸町地内に所在する弥生時代中期～古代にかけての遺跡である。これまでに5次に及ぶ調査が実施されており（沼津市教育委員会1979、1980、1981、1998、2017）、検出された住居

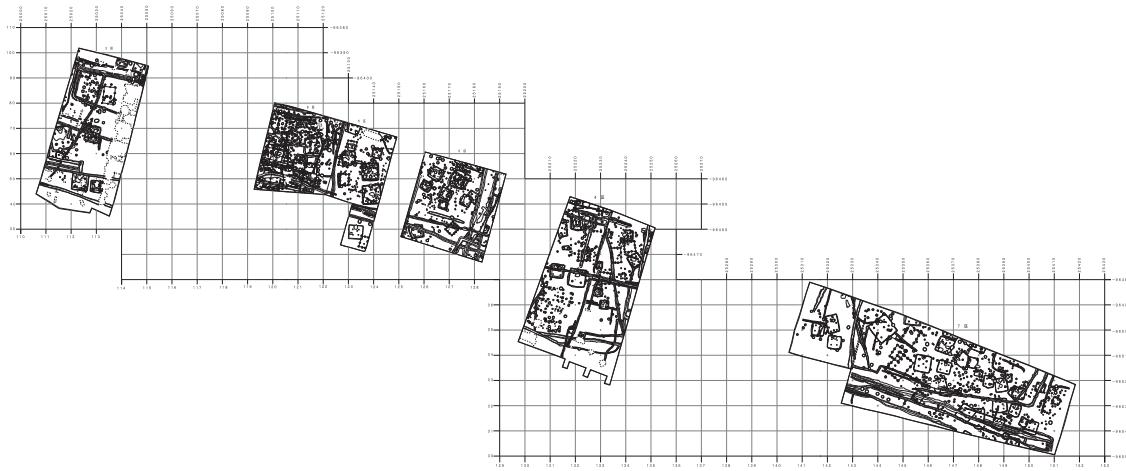


図3 中原遺跡 遺構検出状況図

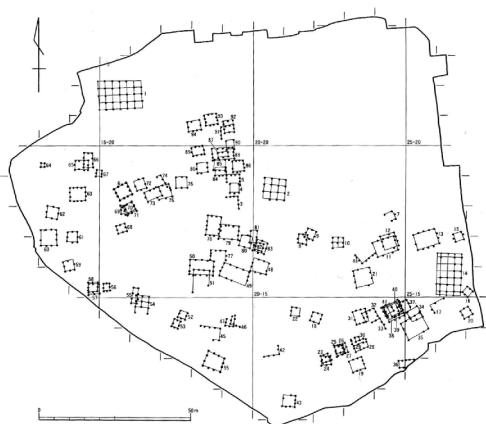
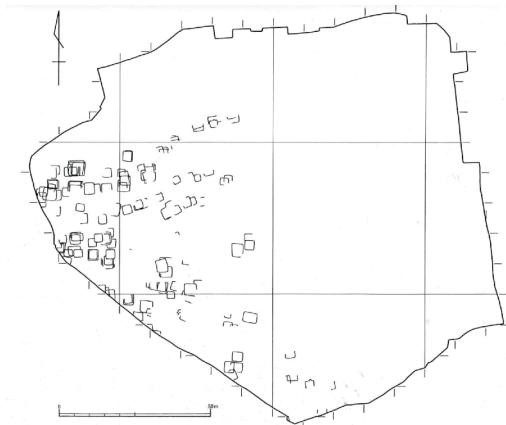


図4 下石田原田遺跡 遺構検出状況図

(上：住居址、下：掘立柱建物)

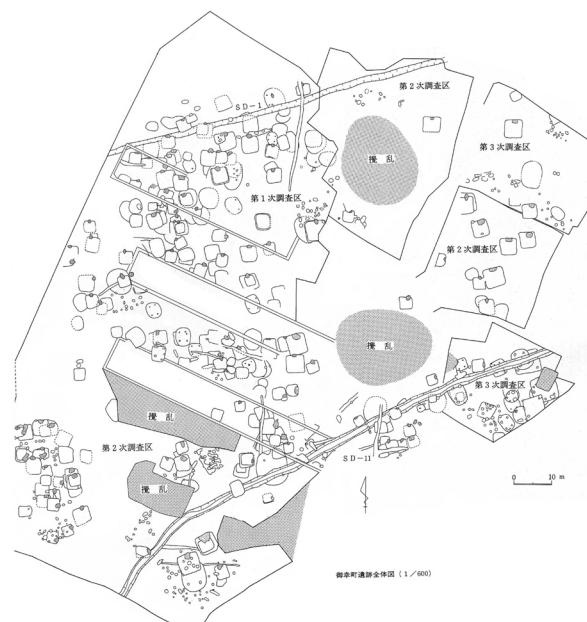


図5 御幸町遺跡 遺構検出状況図

址は総数400軒近くに及び、時期比定可能なものは300軒近くである。

古代に属するものは約70%の230軒を超える一方で明確な掘立柱建物跡は少ないのが特徴である。遺物では土師器や須恵器といった土器とともに鎌などの日用的な金属製品のほかに銅鏡など特殊

な金属製品が出土している。また、近年実施された調査では、硯（円面硯）の一部も出土していることから、官人（官衙に関連した役人）が居住していた集落の可能性がある。

藤井原遺跡 沼津市下香貫地内に所在する遺跡で、香貫山から続く微高地に立地している。昭和

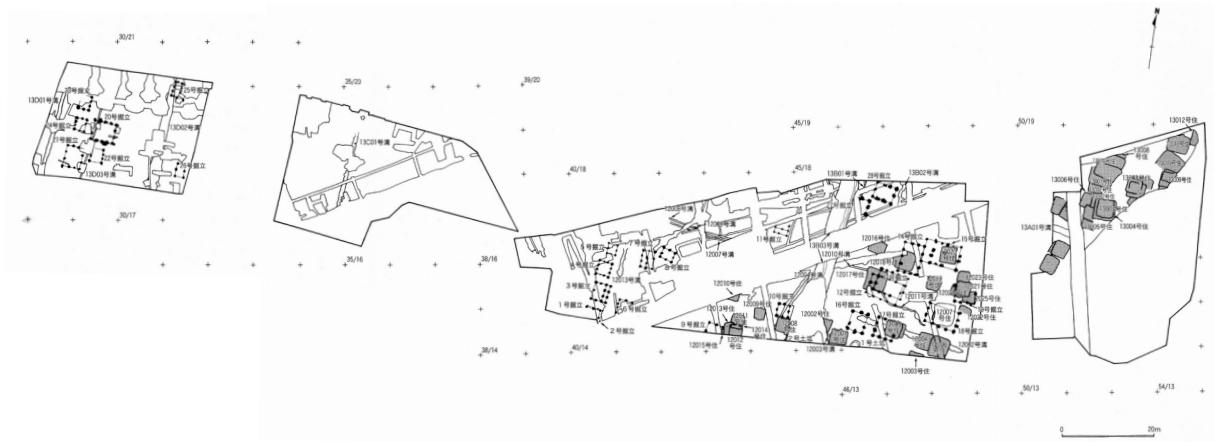


図6 上ノ段遺跡 遺構検出状況図

49～52年度に発掘調査が実施されている（沼津市教育委員会1975・1976・1977・1978）。検出された遺構は住居址197軒、掘立柱建物跡は11棟で、うち8世紀以降の奈良平安時代に属するものは、住居址97軒、掘立柱建物2棟である。また、堀形土器が極めて多数出土しており、平城京木簡に見られる駿河・伊豆国から貢進物である堅魚の水産加工品を作られていたと考えられている。

(2) 官衙

上ノ段遺跡 沼津市大手町1丁目に所在する遺跡であり、キラメッセぬまづ（現プラザヴェルデ箇所）の建設に伴い、平成9・12・13年度に調査が実施された。8～9世紀にかけての多数の住居址や40棟以上の掘立柱建物が検出されており、住居址と掘立柱建物は一部で重複するものの、それぞれの遺構の分布域は分かれている。特に掘立柱建物跡はその大半が規則正しく配置されている様子が伺える。

出土した遺物では須恵器や土師器が多量に出土しているが、それとともに唐三彩陶枕が出土しており、注目される。陶枕は字を記す際の肘置きと考えられ、役人が使用したことが想定され、現在では東海道沿線の県内の主要な都市に所在する遺跡で出土が確認されつつある。また、「倉」と記された緑釉陶器も出土しており、上ノ段遺跡に納税物を管理する施設が設けられた可能性が高く、このことと併せて、検出された掘立柱建物は税として納められたものを収納する倉庫や工房用の管理建物と推定される。これらのことから、上ノ段遺跡は役所機能を有する遺跡である官衙である可能性が高い。

(3) 寺院・仏教関連遺跡

日吉廃寺跡 沼津市富士見町に所在する寺院跡であり、7世紀末ごろに創建された地方豪族による氏寺と考えられている。しかしながら、文献資料等は一切確認されておらず詳細は不明である。日吉廃寺跡における調査は、大正6年に丹那トンネル開通に伴う東海道熱海線敷設工事の際に柴田常恵氏によって塔跡の調査が実施され、また、昭和30年代には当遺跡の調査を輕部慈恩氏が精力的に実施し、東西一町（約108m）、南北二町（約216m）に伽藍が及び、3時期の変遷が確認される寺院と推定さ



図7 日吉廃寺跡 遺構検出状況図

れた。平成 25 年度から 28 年度にかけて実施した本調査では、山田寺様式期の大量の瓦とともに、仏像の螺髪や博仏の一部が出土しており、瓦当様式を踏まえると当該地に県内でも最古級の寺院が存在することは確実である。しかしながら、近年実施した発掘調査の結果、当該地は大規模な土地の改変を受けており、地山（黄瀬川扇状地堆積物）を掘り込んだ柱穴の列が残っているのみで、基壇等は残っていない可能性が高いことが判明した。また軽部氏が想定した伽藍配置を示すような状況が確認されないことから、日吉廃寺跡の実態については不明な点が多い。

仏教関連遺跡 仏教との関連が想定される遺跡として、いずれも古墳（墳墓）である清水柳北 1 号墳と宮下古墳が上げられる。清水柳北 1 号墳は沼津市足高尾上地内に所在する上円下方墳である。全国的に類例が少ない墳丘形態であるとともに、周溝から火葬骨を入れるための石櫃が出土している。宮下古墳は沼津市大岡地内に所在する遺跡であり、大正期に発掘調査が実施されている。横穴式石室に割り抜き式の石棺と組合せ式石棺が安置されていた古墳とされている。副葬品に仏具と推測される銅製の水瓶や高台付の鉢などが出土している。



写真 1・2・3 日吉廃寺跡出土遺物（左：軒丸瓦、中：螺髪、右：博仏）

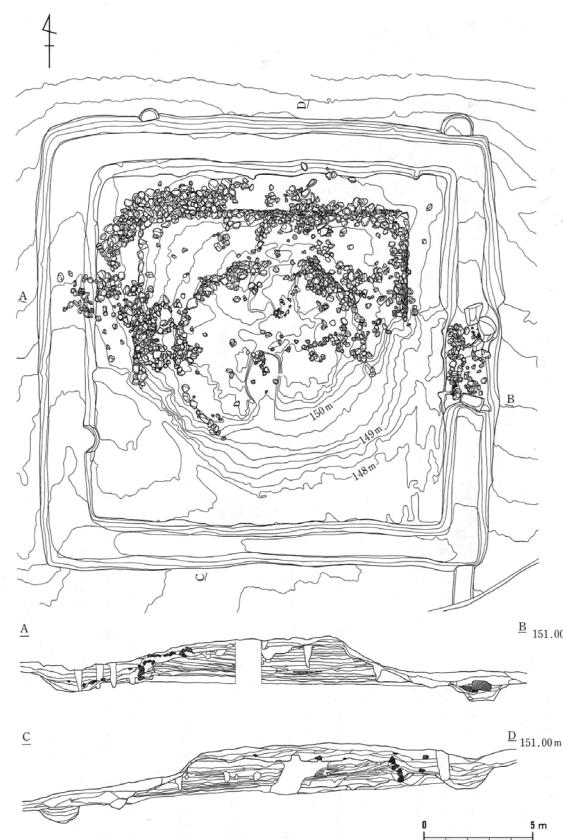


図 8 清水柳北 1 号墳

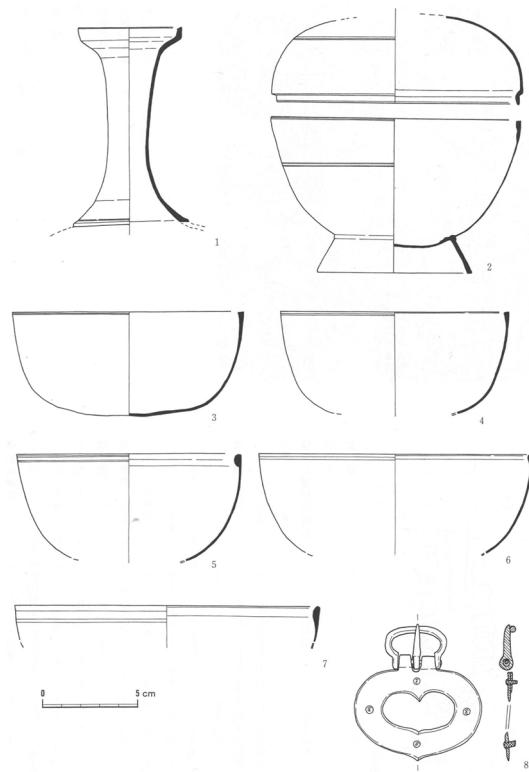


図 9 宮下古墳出土遺物

3 古墳時代～古代にかけての遺跡消長とその意味

前述した遺跡の継続期間を踏まえ、その消長をまとめると図10のようになる。6世紀後半から東畠毛遺跡や御幸町遺跡で遺跡が形成されるものの、現状で確認されている6世紀代の遺跡は比較的少ない。

7世紀になると確認される集落の数がやや増加し、8世紀に入ると確認される遺跡が劇的に増加する。

官衙と想定される上ノ段遺跡や寺院跡である日吉廃寺跡はまさにこの時期である。この状況は9世紀前半まで続くが、9世紀後半になると遺跡数が減少し、10世紀に入ると遺跡数はさらに減少する。

このような遺跡の消長が示すことは、古墳時代後期から終末期にかけての遺跡の様相について、愛鷹山麓には愛鷹山南麓古墳群と称される無数の群集墳が、千本砂礫洲上には松長古墳群などが、狩野川右岸の黄瀬川扇状地上には石田古墳群が、狩野川左岸の香貫山から続く微高地上には東本郷古墳群や宮原古墳などが築かれていることから、それぞれの地域において集落が存在しそれに伴った有力者の墓域が形成されていたと考えることができる。

一方で、古代になると、前述した地域にも遺跡が引き続いて形成されているが、沼津市の中心市街地

を流れる狩野川の両岸において比較的多数の遺跡が確認されようになる。それらの遺跡の中には官衙遺跡(役所)と考えられる上ノ段遺跡や氏寺(有力者(地方豪族など)によって建立された寺院)である日吉廃寺跡など、当時の政治や文化において重要な遺跡が存在している。

このような状況は古代になると、中央集権による政治体制が確立したことにより、日本各地に役所機能を有した遺跡(官衙)が作られ、そこを中心として遺跡が分布するようになる。当時駿河国的一部であった沼津市域においても全国的な社会変化と同様な展開として、役所機能を持つ遺跡を中心とした遺跡分布が形成されていったと理解できる。

これらの点をふまえ古代の沼津の遺跡立地の特徴を考えると、弥生時代以降引き続いて水田耕作やその他の生業のために市内全域の海沿いを含めたやや微高地に集落遺跡が形成されているものの、政治・経済・文化の中心である官衙や寺院といつたいわば特殊な遺跡は狩野川河口部付近に形成されるという、その当時の社会体制を如実に示しているといえる。

そして、このことは規模や内容が違えども、現在の沼津市における街の様相に繋がるものであるといえる。

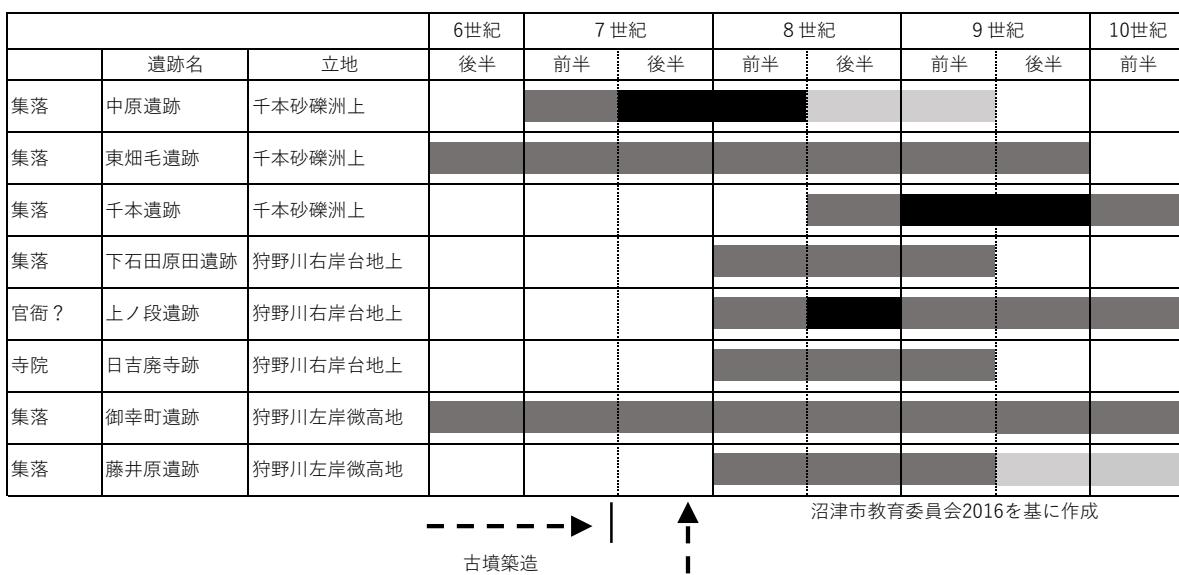


図10 古代主要遺跡の消長図

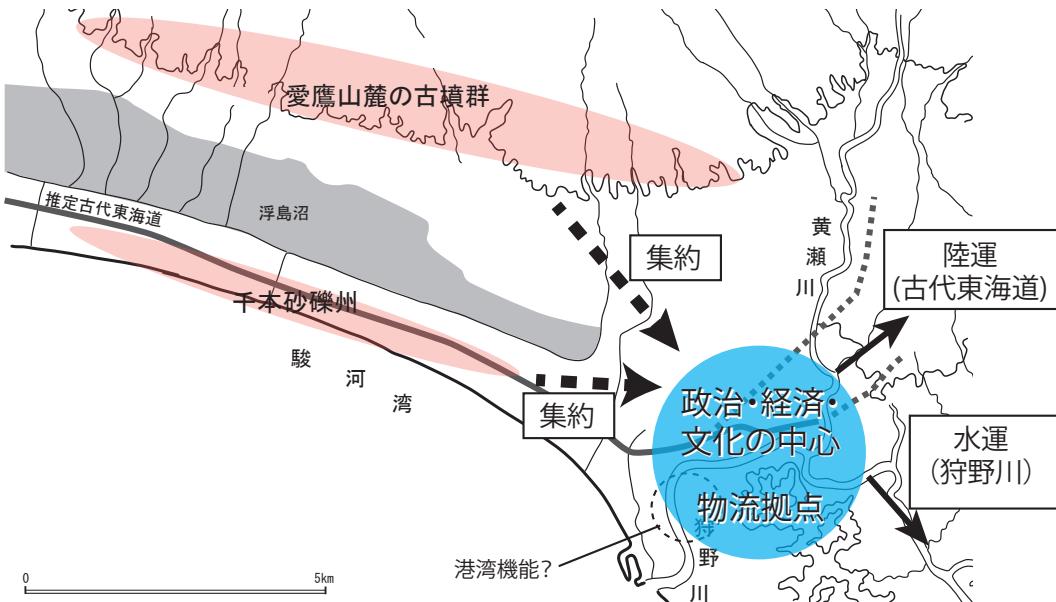


図 11 古代における中心地の変化に関する模式図

4 伊豆とのつながり

沼津市域における古代の遺跡の立地は前述のとおりである。しかしながら、官衙の可能性がある上ノ段遺跡や寺院である日吉廃寺跡のような遺跡がなぜ黄瀬川扇状地上に形成されたのであろうか。明確な根拠となるような遺跡や遺構、遺物は確認されていないものの、狩野川の河口域に位置していることが最大のポイントである。すなわち狩野川中・上流域との関わりである。

狩野川は伊豆半島を源として北上しながら流れ、黄瀬川との合流地点あたりで香貫山を北側から回り込むように大きく迂回して駿河湾に注いでいる。680年に駿河国から伊豆国が分国されたことから、旧国単位では異なるものの、狩野川流域の三島市、函南町、伊豆の国市に所在する当該期の諸遺跡へ水路で物資が運搬される場合、狩野川がメインの水路であったことは想像に難くない。この一例として伊豆国を中心とする三島市街地を流れる大場川・御殿川とは繋がっており、その流域には伊豆国の国庁推定地や伊豆国分寺、官衙関連遺跡とされる伊勢堰遺跡や人面墨書き土器で有名な箱根田遺跡などがある。このことから、当地方に海路や陸路によってもたらされた物資は沼津の地に一度集積され、そこから狩野川を上る形で、船などで運搬する際の港（＝物流拠点）としての役割があったものと推測されよう。

ただし、現在のところいずれの地域においても明確な荷揚げを行うための遺構を有する遺跡は確認されていないが、狩野川の河口域には港が存在したことは間違いないであろう。

5 海浜部の遺跡は水産物の加工場か？

(1) 堀形土器と水産物加工

奈良などの都から出土する木簡には、駿河や伊豆からの貢進物として堅魚煎汁（カツオイロリ）や煮堅魚、荒堅魚などの記述があることから、駿河や伊豆において堅魚を使用した水産加工品が作られていたと考えられている。この水産加工品を作るための土器として堀形土器の使用が想定されている。堀形土器は直径が40cmを超えるような大型の鉢型を呈する土器で、沼津市では海浜部や狩野川河口域に存在する藤井原遺跡、御幸町遺跡、千本遺跡、下石田原田遺跡、中原遺跡といった集落遺跡において日常の道具である壺や甕などとともに出土している。このことから、これらの遺跡は水産物の加工品場であった可能性がある。

しかしながら木簡に残る堅魚加工品が堀形土器で作られていたとする記録は残っておらず、その実態は不明である。かつて沼津市歴史民俗資料館の学芸員であった瀬川裕市郎氏が、自身が発掘調査を担当した藤井原遺跡から出土した堀形土器の検討や奈良・平城京木簡の記述内容などを積極的に検討した。

瀬川氏以後、古代の堅魚製品についての研究はあまり行われていない。近年、東京医療保健大学の三舟隆之教授を中心とするグループが古代の堅魚製品にかかる学際的な研究を進めており、その一環で、現在、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の庄田慎矢氏の研究グループが沼津市及び富士市出土の堀形土器に残る残存脂質分析を実施しており、その結果が待たれる。

なお、堀形土器は住居址からの出土が大半であるが、堀形土器が出土する住居址と出土しない住居址が存在する。このことは堀形土器が專業的な使用をされていた可能性を示唆しており、今後住居址ごとに出土する土器の器種を確認し、堀形土器が出土する住居址での特徴を把握する必要がある。

(2) 壺 Gについて

奈良・平城京木簡に記録が残る堅魚製品の中でも堅魚出汁を入れる容器として「壺 G」と呼ばれる土器が使われていたとする意見がある。壺 G とは平城京から出土した土器の分類で壺の G 類に分類された土器であり、考古学研究者は通称で「壺 G」と

呼んでいるもので、奈良時代後半から平安時代前半にかけて都や駿河・伊豆・関東・東北に分布・流通した須恵器であり、細長い体部に、太くて長い頸部を付す形態で、轆轤水挽き成形で作られているもの（小田 2023）である。なお壺 G については上記のような容器としての役割のものとする説の他に、水筒や花瓶（仏具）ではないかとする意見もあり、いまだ定説はない。

静岡県では藤枝市の助宗古窯址群や伊豆の国市の花坂古窯址群といった窯址で出土していることから、県内の古代の窯で作られた土器と考えられている。堀形土器と壺 G が伴って出土する事例は少ないものの、富士市の東平遺跡の住居址で共伴が確認されていることから、堀形土器を使用して作った堅魚の煮製品を入れる容器として壺 G が使用されたと考えられている。しかしながら藤井原遺跡、千本遺跡、下石田原田遺跡といった沼津市内の遺跡で壺 G が出土しているものの、出土事例は圧倒的に少なく、実際にどのように使用されたかは不明な点が多い。

駿河・伊豆での堅魚などの水産加工については、木簡による文献資料が存在することから、行われていたことは間違いない。しかしながら、それらを示す具体的な考古資料についてはまだまだ不明な点が多く、考古学的な知見のみではなく自然科学的な側面からなどの更なる検討が必要である。

おわりに

沼津市域において、古代では官衙推定遺跡（上ノ段遺跡）や寺院（日吉廃寺跡）などの政治・経済・文化の中心となる遺跡が狩野川右岸に設けられ、この一帯の周辺部に集落遺跡が分布する遺跡様相を呈することになる。これは、戦国期の三枚橋城跡や江戸時代の沼津城跡がこの一帯に存在したのと同じであり、前述したように現在の沼津の街の様相につながっていると言える。すなわち狩野川の河口部付近という地理的要因がその後の街・地域の発展に密接に結びついており、まさに「川」と沼津の密接な関係を示す良好な一事例といえるのである。

※報告書等の参考文献は割愛させていただいた。

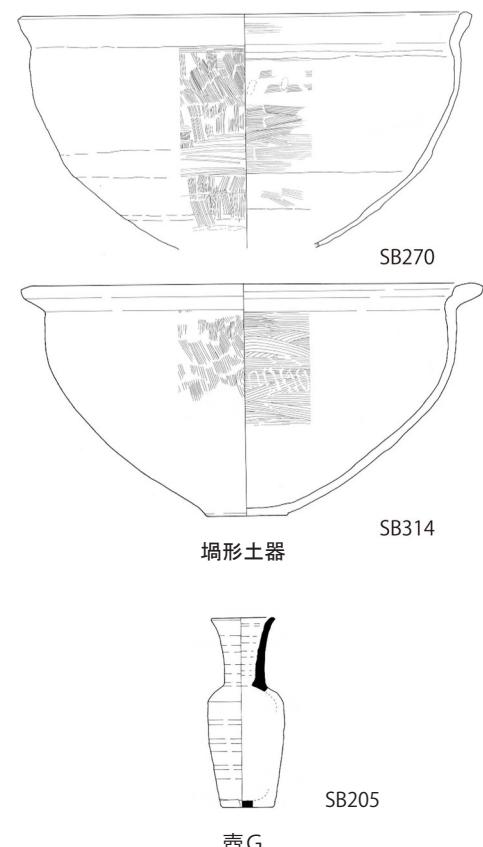


図 12 御幸町遺跡出土堀形土器と壺 G（縮尺不同）

事例報告 2

富士郡家の原風景と富士川

佐藤 祐樹

(富士市教育委員会)

はじめに

古代中国では「善く国を治める者は、必ずまず水を治める」と言われ、日本でも武田信玄による「信玄堤」を含めた富士川の流水のトータルコントロールシステムは現在もなお機能している。富士市においても延宝2年（1674）、中里村の古郡家3代による50余年をかけた「雁堤」の築堤工事により、富士川下流域は加島五千石といわれた新田地帯に開発され、現在の富士市発展の礎となつたと評価される。

また、徳川家康が京都の豪商である角倉了以に富士川の開削を命じたことは、甲斐の年貢米や豊富な物資を大量に江戸に運ばせるためであり、「川の道」の確立といえる。

古代の駿河国富士郡においても、富士川が果たした役割は大きく、流通を支える「道」として地域の発展にとって欠かせない存在であったと考えられている。そこで、本論では、古代富士郡の発展を支えた川の役割について紹介していくこととした。



1. 別所古墳群
2. 丸ヶ谷戸遺跡
3. 中野遺跡
4. 妙見古墳群
5. 山王古墳群
6. 中原4号墳
7. 横沢古墳
8. 西平1号墳
9. 伊勢塚古墳
10. 東平1号墳
11. 国久保古墳
12. 実円寺西1号墳
13. 東坂古墳
14. 富士岡1古墳群・花川戸4号墳
15. 寺屋敷古墳
16. 天神塚古墳
17. 琴平古墳・道東古墳
18. 須津J-6号墳・千人塚古墳
19. 浅間古墳
20. 沖田遺跡
21. 船津薬師塚古墳
22. 船津ふくべ塚古墳
23. 荒久城山古墳
24. 秋葉林1号墳
25. 的場3号墳
26. 庚申塚古墳・山の神古墳
27. 神明塚古墳・松長古墳群

図1 富士・沼津市域の主要古墳

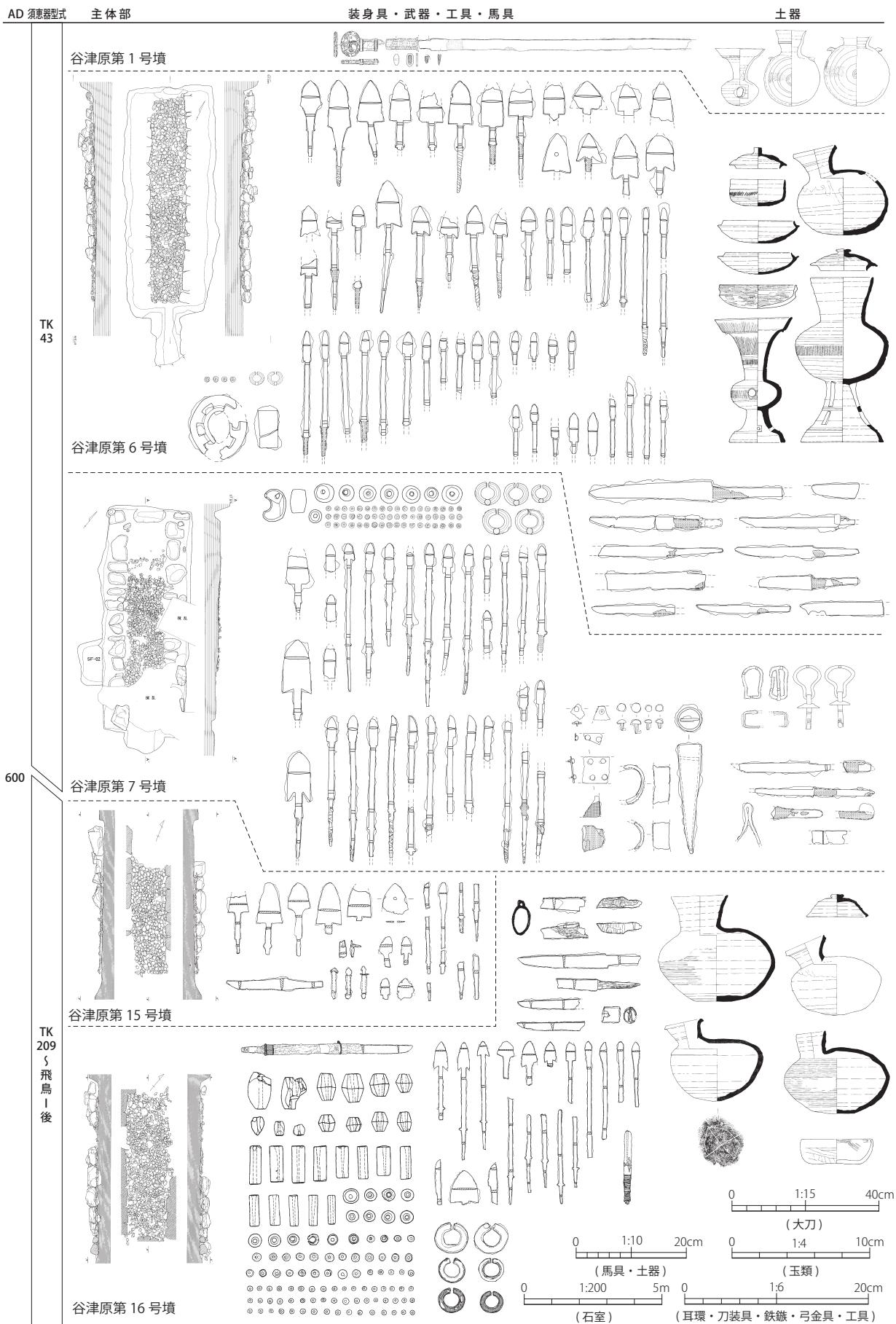


図2 谷津原古墳群の造墓活動 (1)

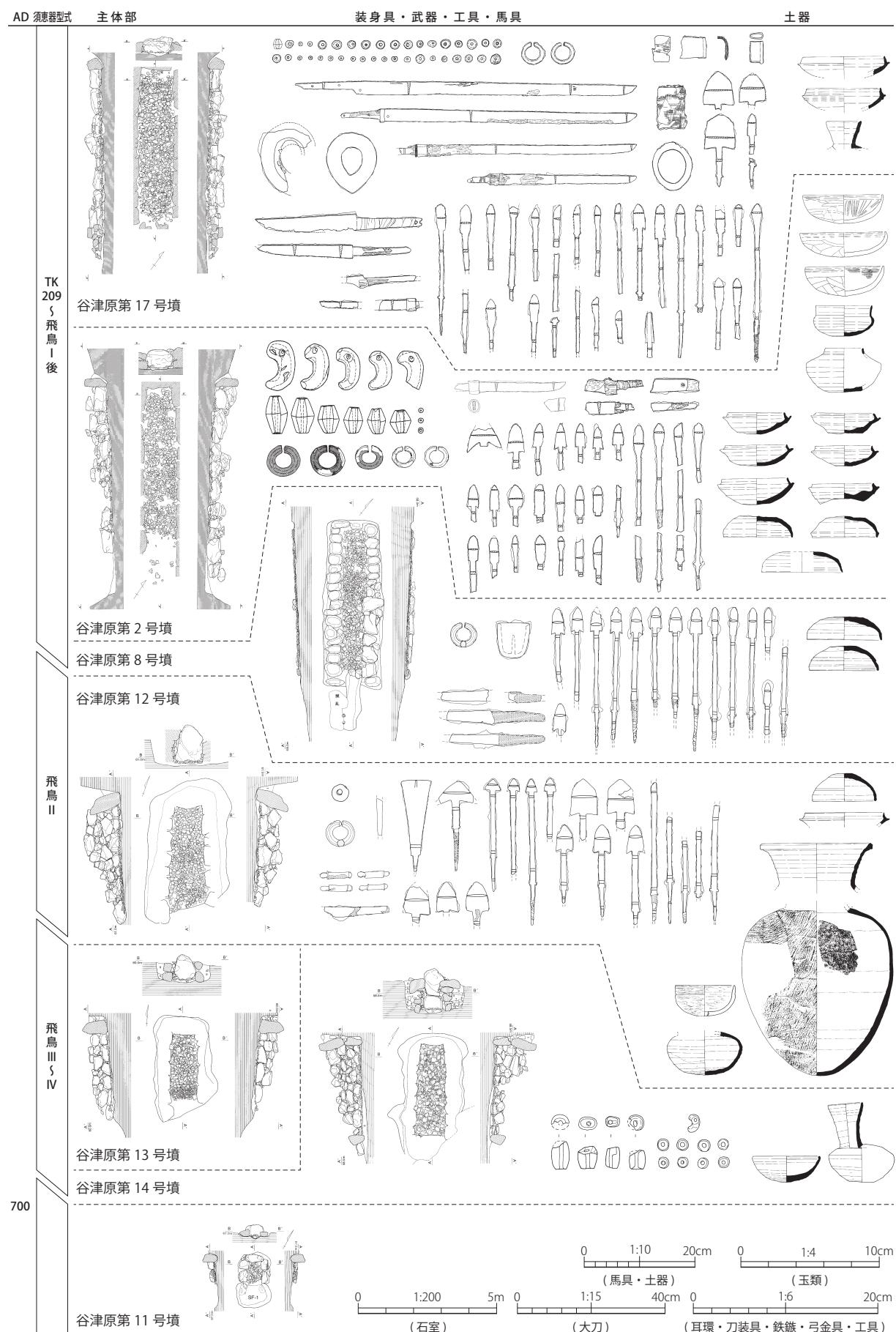


図 3 谷津原古墳群の造墓活動 (2)

1 富士川西岸古墳群の胎動と富士川東岸の集落域

駿河湾から富士川を遡り甲斐に至るルートが道として機能し始めたのは、古く縄文時代の頃であったと考えられる。弥生時代後期には富士川を10km程度、遡った場所にある清水岩の上遺跡で菊川式土器の影響を受けた土器がまとまって出土しており、広く太平洋岸と甲斐を含めた中部高地との活発な地域間交流の存在を示している（佐藤2015）。

富士川西岸古墳群の胎動 富士川の西岸には200基以上の古墳群が存在したと推定され、その大部分が富士川に注ぐ吉津川周辺の丘陵及び岩淵山塊の斜面に立地し、谷津原古墳群、室野坂古墳群、山王古墳群、妙見古墳群、小山古墳群が半径200mの範囲に群集している（石川2008）。谷津原古墳群では、6世紀末の谷津原1号墳の築造（大谷2022）から造墓活動が開始されて、7世紀を最盛期として、石室規模を小型化しつつ8世紀に至るまで墓域が展開することが明らかとなっている。

富士川東岸の集落域 一方、7世紀の集落域については、古墳群の展開する富士川西岸では明確には確認できず、造墓集団の拠点を富士川西岸域の古墳群周辺に求めることが困難である。その候補地として挙げられるのが、沢東A遺跡をはじめとした富士川東岸域の集落群である。

その当時、富士川下流の流路は、現在の河道より東寄りの田子ノ浦港方向に向かい多くの派川を持って駿河湾に流入し、広大な富士川扇状地を形成していたと考えられている。富士川西岸古墳群と沢東A遺跡はこの富士川扇状地を挟んで立地する位置関係にあたる。沢東A遺跡は古墳時代中期の5世紀後半に出現し、倭王権の東国支配の一端を示す新たなカミマツリである石製模造品を使用した水辺祭祀の存在が確認され、潤井川を含めた治水に対して新たな灌漑技術を備えた渡来人を含む先進技術者集団の居住エリアと考えられている。6世紀後半に作られた伝法古墳群の中原4号墳の被葬者もこのエリア



図4 古代富士郡家周辺の景観（8世紀）

を主な活動拠点として活躍していたと想定され、集落としての最盛期を迎える7世紀には、富士市域でも随一の規模を有する大集落として発展している。

愛鷹山に造られた1000基以上の古墳の造墓集団の拠点に浮島ヶ原低地を挟んだ田子ノ浦砂丘上の集落に求めるのと同じように、富士川西岸古墳群の造墓集団の拠点に富士川扇状地を挟んだ沢東A遺跡周辺に求めることもできるだろう。

2 富士郡家の成立と

伝法古墳群・富士川西岸古墳群の連動

富士郡家の成立 奈良時代になり、沢東A遺跡の集落規模が一気に縮小するのに対応するようにして、現在の富士市役所の北側一体にひろがる東平遺跡（富士郡家）が急成長をみせる。郡家設置以前の評家については明確ではないが、仮に設置されているとしたら、前述の沢東A遺跡が有力な候補地と言える。東平遺跡は富士郡家の比定地とされている



図5 中原第4号墳出土品

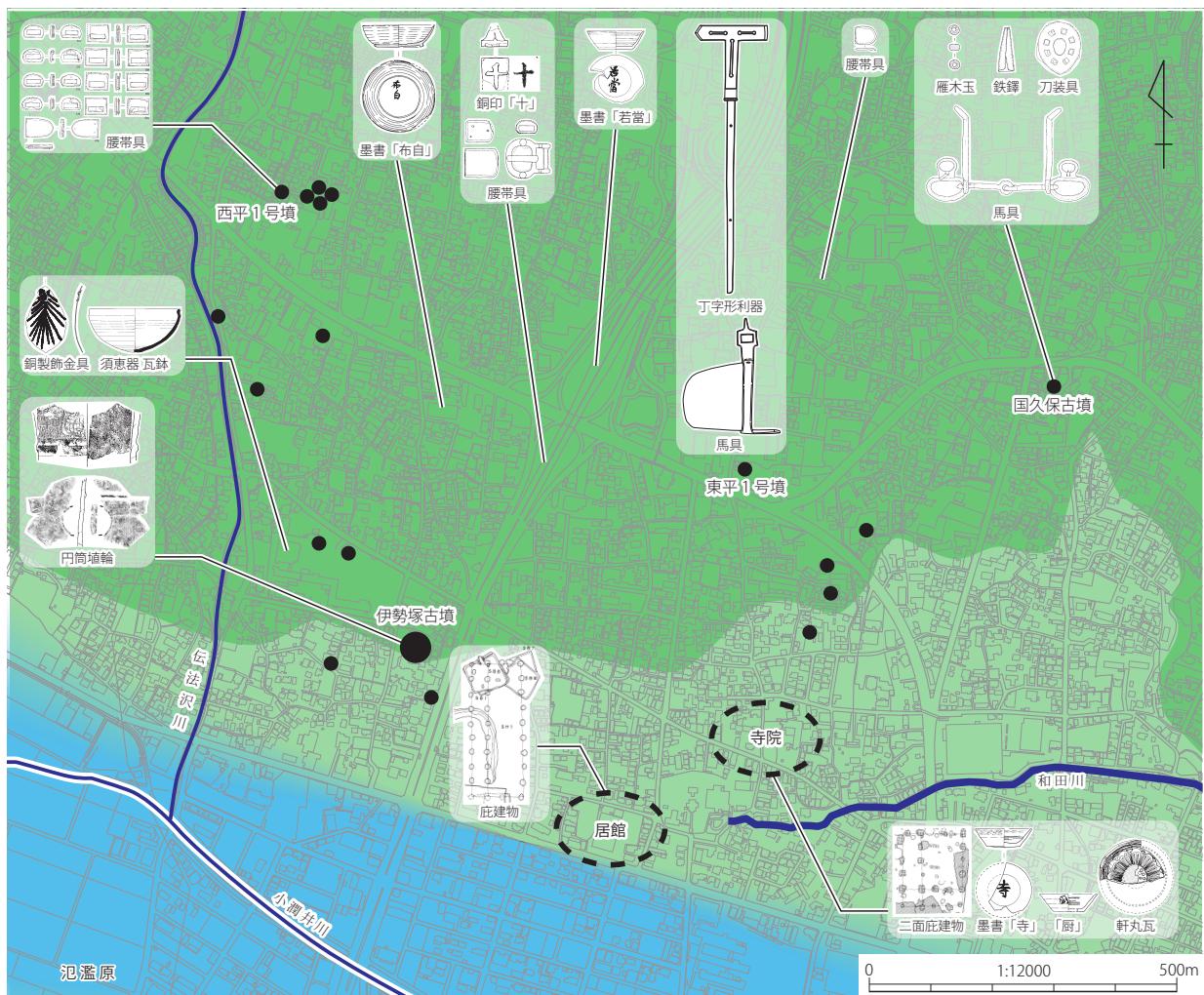


図6 富士郡家の様相

ものの、発掘調査において郡司が政務にあたる政庁や正税出舉保管の正倉、宿泊用の館などの構造は明確になっていない。しかし、整然と並ぶ倉庫群の存在や墨書「布自」の出土など様々な調査成果から東平遺跡一帯を富士郡家と考えることは学界の共通認識になってきているといえる。特に、郡家成立以前の6世紀後半から7世紀にかけて展開する伝法古墳群の存在から想定される有力層の形成とその墓域周辺の東平遺跡が8世紀に発展するということ、また古代東海道を含む交通の要衝に位置し、富士川扇状地の最も東側に位置する和田川の湧水地付近にあたることなどの地理的状況も東平遺跡を富士郡家と考える根拠となっている。

また、東平遺跡に隣接して三日市廃寺跡とされる古代寺院が存在する。明確な寺域や構造は明らかとなっていないが、石川寺式の影響を受けた丸瓦などが出土している。なお、この瓦は小田原市千代廃寺出土瓦の文様構成の一部と共にしていることから、足上郡からさわ瓦窯の工人が技術供与をして三日市廃寺の瓦を生産したと考えられており、7世紀における在地首長間の郡域を超えたネットワークの存在が指摘されている（田尾2011）。

伝法古墳群の運動 東平遺跡の西側エリア内には石室規模が明らかに小さい古墳が点在している。その中の一つに西平第1号墳が存在する。石室の発掘調査が部分的に行われているに過ぎないが、方頭大刀や蕨手刀に加えて、銅製の腰帶具が出土している。これらの副葬品から被葬者は富士郡家大領級であると想定される。8世紀に展開する郡家周辺に6世紀

後半以降場所を変えながらも古墳が造られ続けていたことを示している。

富士川西岸古墳群の運動 富士郡家周辺で西平第1号墳を含む小石室墳が造られている頃、富士川西岸古墳群でも6世紀後半以降の造墓活動が谷津原古墳群を含む各古墳群で継続されていることが分かっている。特に妙見古墳群ではその大部分が7世紀末から8世紀のものと推定され、I2号墳やI14号墳からは火葬骨を収める蔵骨器に使用されたと考えられる有蓋短頸壺が出土していることから、火葬という新たな葬送概念を取り入れた富士郡家の官人の墓であると考えることができる。

富士郡家と構造的集落 郡域における政治的、経済的、宗教的中心地が郡家であり、それが東平遺跡周辺であることはすでに述べたとおりである。郡家の役割は様々であり、これまで「官衙関連遺跡」として理解されてきたような複数の集落と有機的関係を有していたと考えることが出来る。例えば、富士郡家を中心に広がる街道や境界の管理を行うことや、荷揚げ場やそれらを一時的に管理する管財的要素を持つ集落、または、それらの監視を担う集落など様々な性格を有する集落を有機的・構造的に結びつける中心的役割を担っていたのが6世紀以降に成長した在地首長層であり、富士郡家の郡司層の姿であったと考えられる。

具体的に境界を管理する遺跡としては天間代山遺跡があげられる。天間代山遺跡は県道414号線（大月線）付近の丘陵上に位置する遺跡で富士郡家からは4kmほど離れている。限られた調査ではあるも

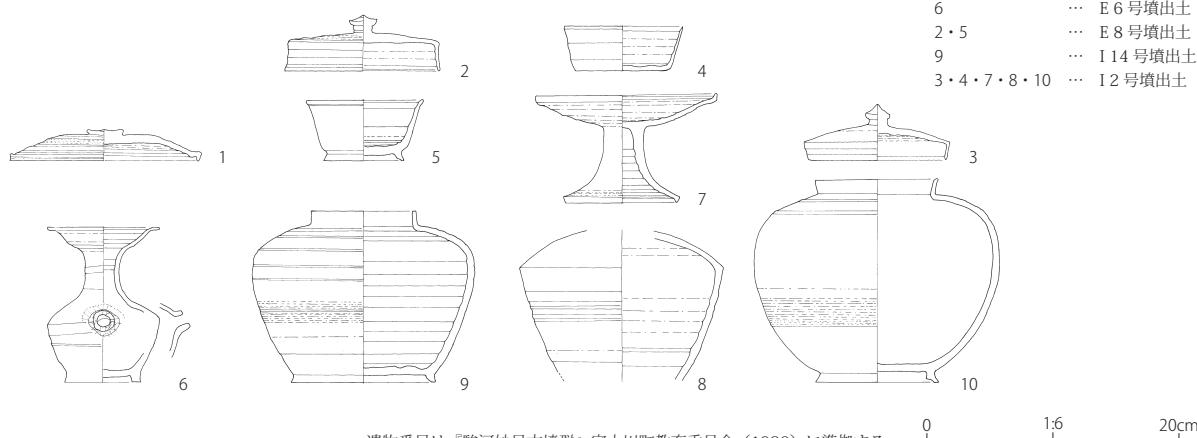
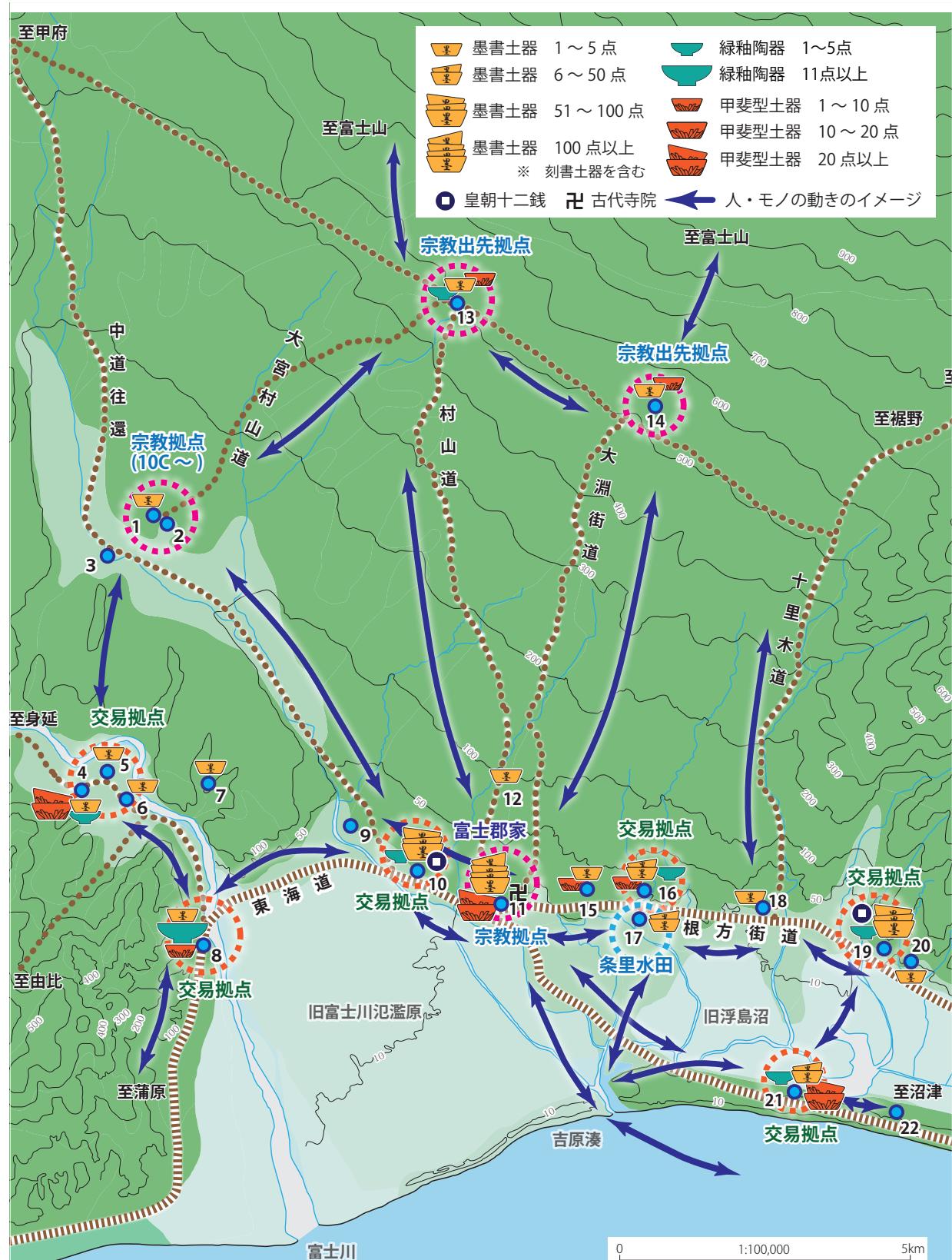


図7 妙見古墳群出土須恵器



1. 浅間大社遺跡
2. 大宮城跡
3. 泉遺跡
4. 浅間林遺跡
5. 中野遺跡
6. 中野石切場遺跡
7. 初田遺跡
8. 破魔射場遺跡
9. 沢東A遺跡
10. 中桁・中ノ坪遺跡
11. 東平遺跡
12. 横沢古墳
13. 村山浅間神社遺跡
14. 岩倉B遺跡
15. 舟久保遺跡
16. 沖田遺跡
17. 宇東川遺跡
18. 術宣ノ前遺跡
19. 宮添遺跡
20. コーカン畑遺跡
21. 三新田遺跡
22. 柏原遺跡

図8 古代富士郡家周辺の景観（9～10世紀）

の奈良時代から平安時代にかけての建物跡から墨書土器や転用硯などが出土しており、物資の往来などを監視し、富士郡家の玄関口を管理するような性格を持ち合わせていたと想定できる。

また、富士川西岸古墳群の周辺では7世紀には明確な集落が展開しなかったにもかかわらず、8世紀に入り小規模ながら、古墳群に隣接した破魔射場遺跡が展開することは、古墳の造営母体としての位置づけよりも富士郡家の実施する境界管理という役割を担っていた可能性も想定されよう。

3 富士川河口周辺に展開する

古代物流ターミナル

富士川河口西岸の物流拠点 富士川を介した甲斐との物流が本格化するのは9世紀後半になってからである。現在の富士川サービスエリア建設時に発掘調査された破魔射場遺跡や県道10号線沿いに展開する浅間林遺跡からは甲斐で作られた甕や壺がまとまって出土しているほか、東海道や海路をつかって西方から運ばれた灰釉陶器や緑釉陶器なども多く出土している。富士川河口西岸に展開する破魔射場遺跡には多方面から運ばれる様々な文物が集まり、ここを経由して行き先を振り分けるような性格を有する物流拠点であったと位置づけることができよう。

田子ノ浦砂丘上に位置する交易拠点 富士マリンプールの東側の田子ノ浦砂丘上に存在する三新田遺跡でも、9世紀頃の甲斐との交流を示す土器が多く出土している。また、「三枝」の墨書きがある土器も注目される。三枝とは甲斐国山梨郡に本拠地を置いた三枝氏との関連を想定することができ、甲斐との頻繁な交流を見ることができる。遺跡はラグーンである浮島ヶ原に面し、後の東海道や吉原湊に面していることからも交通の要衝として、他地域からのモノや人を迎える交易拠点としての性格を有していたと考えられる。

おわりに

富士郡家と周辺に展開する遺跡に対して、富士川を使った交易という側面から評価をしてきた。川は現在でも市域を分ける際の境界としての位置づけがなされるが、それと同時に「道」としての位置づけができることが明らかである。また、これまで触れてきた遺跡が、現在でも幹線道路沿いに位置しているということは、都市の発展にとって道の果たした役割が大きかったということを示している。富士郡家は、富士川や和田川、太平洋沿岸の水上交通と東海道駅路などの複数の道の結節点である要衝であり、それまでの在地首長層の成長した本拠地である事が占地の決定的要因であると結論付けられる。

参考文献

- 石川 武男 2008 「富士川西岸域古墳群の様相」『谷津原古墳群 平成16・17年 第4・5時調査報告書』富士川町教育委員会
- 大谷 晃二 2022 「谷津原1号墳の单竜環頭大刀」『富士市内遺跡発掘調査報告書 令和2年度』富士市教育委員会
- 佐藤 祐樹 2015 「清水岩の上遺跡出土の弥生土器」『富士市内遺跡発掘調査報告書一平成24・25年度一』
- 田尾 誠敏 2011 「師長国造領の分割と地域拠点の成立—考古学からみた在地支配と首長層の動向—」『小田原市郷土文化館研究報告』No.47
- 藤村 翔 2019 「富士山・愛鷹山南麓の古墳群の形成と地域社会の展開」『賤機山古墳と東国首長』季刊考古学・別冊30

図1・4・8は藤村氏作成の富士山かぐや姫ミュージアム展示パネルを一部修正